



おかやす きくし

岡安 喜久仕 氏

(本名 藤井 朝枝)

生年月日 明治 44 年 11 月 2 日生

住 所 田辺市上屋敷町

明治 44 年 (1911 年) 11 月 2 日、日高郡御坊町 (現御坊市菌) に生まれ、12 歳の時、田辺に転居する。

幼少の頃から三味線を習い、18 歳の時、長唄の修行をするため単身神戸へ渡り、岡安流師匠岡安喜久之介氏の内弟子となる。日本の伝統芸能の多くがそうであったように、長唄もまた全ての稽古は師匠と対峙して行う口伝によるもので、礼儀作法をも含めたその修行は大変厳しいものであった。寒稽古などでは、声帯が破れ、血が出るまで発声練習を繰り返したが、それが長唄独特の艶と深みのある声をつくっていった。

厳しい修行の甲斐があり、昭和 8 年 (1933 年) 3 月、岡安流家元より岡安喜久仕の名を許され、岡安流の名取となった。以後 27 歳で田辺に戻るまでの 5 年間、神戸で研さんを積みながら、月に一度、当時の定期船「那智丸」で田辺や白浜の弟子の家に長唄、三味線の出稽古に通い、当地方の花柳界の芸能の指導に尽くした。

田辺へ戻ってからは上屋敷町の住所に居を構え、長唄、三味線の指導を続けたが、厳しさのなかにも優しさのある氏の指導は、単に技術だけではなく日本の心を伝える奥の深いもので、多くの門下生が集うところとなった。

最近では、田辺伝統芸能協会による「たなべ伝統芸能まつり」や田辺市文化協会による「文協フェスティバル」に門下生とともに出演し、得意とする「新曲浦島」や「越後獅子」を披露したが、独特の品位と風格があるその独吟は、多くの人々を魅了し、高い評価を受けている。特に、紀南文化会館のこけら落としなど、慶事に演じられる「三番叟」の地方 (伴奏) としてなくてはならない存在であるといわれている。

長唄の師匠となって 60 余年、戦前、戦後にわたり、自己の芸域を広げるとともに後進の指導にあたり、紀南地方の伝統芸能の振興に尽くした功績には、誠に大きなものがある。また、岡安流の古参として邦楽界にとっても貴重な存在であり、日本の伝統芸能の保持継承に大きな役割を果たしている。

第 25 回 (平成 6 年)

(略 歴)

昭和 4 年 (1929 年)	岡安喜久之介氏のもとで長唄の修行を始める
昭和 8 年 (1933 年) 3 月	岡安流家元より岡安喜久仕の名を許される
昭和 13 年 (1938 年) 3 月	岡安むつみ会を主宰